

横山操

《ふるさと》

第 二次大戦後、日本画の世界は因襲的な性格ゆえに鋭い批判を受けましたが、日本画の危機を深く受け止めたながらも、日本画に意識的にこだわり、新たな表現を探究した画家のひとり、横山操です。

横山操は川端龍子が主宰する青龍社を舞台に、《炎炎桜島》や《塔》など、同時代の社会に密着した、豪放な筆致によるダイナミックな大作を次々と発表して注目を浴びました。しかし一九六二年の青龍社脱退後は、作品の発表場所も画廊やデパート会場での個展やグループ展へと移行し、画面も小型化、画風も一変します。日本画とは何かという問いとともに、日本画の原点に立ち戻るように描かれた瀟洒な風景が多く、それまで画面の奥底に隠れていた寂寥感や繊細な叙情性が前面に現れ、精神的な奥行きと広がりを見せるようになりました。横山操の代名詞にもなった一連の「赤富士」もこの時期の作品です。

新収蔵の《ふるさと》は、そうした後半期の風景表現の特徴をよく表す代表作のひとつ。北国の澄んだ冷たい空気と夕映えの茜空のもと、S字状に曲がりくねる川に誘われるかのように、絵を見る人は広漠と拡がる野原の中へと引き込まれます。真っ赤に染まる秋空と銀色にきらめく水面、裸木の墨と金色に輝く生い茂る茅かや。鮮烈な色彩対比が美しくも、どこか哀愁も感じさせる作品です。

遠くに山を望み、裸木が点在する荒涼とした風景の原点には、幼少期の画家の心深くに刻まれた故郷、新潟の風景があるのでしょうか。

前年に体調を崩した画家が復帰後まもなく、第二回太陽展で発表したのがこの作品で、その展覧会に与えられた課題は「愛」でした。横山操は複雑な生い立ちが影を落とし、孤独な少年時代について多くを語りませんでした。一九六〇年代半ばから自らの原点にも立ち返るかのように、裸木のたたずむ原風景をよく取り上げています。しかし、それはもはや画家個人の追憶と結びついた特定の場所の風景であることを超えて、見る人の心に深く印象づけられる根源的な風景になっているのではないのでしょうか。この作品も遠い記憶と結びつき、懐かしさと寂しさや美しさが入り混じる、多くの人が心に抱くであろう「ふるさと」を描いたのにほかならず、画風がいかに変わろうとも、初期から一貫して実感を大事にした画家の姿勢も、うかがい知ることができます。

《ふるさと》は、二〇一六年に相次いで他界された基子もとこ夫人と娘の彩子さいこ氏のご遺贈品として、初期の油絵《カラガランダの印象》(一九五〇年)、水墨の《絶筆》(一九七三年)、そしてアメリカ旅行中に描いた素描五点とともに、当館のコレクションに加わりました。これにより横山操の画風の展開を、ひとつとおりたどれるようになりました。

(美術課主任研究員 都築千重子)

横山 操 (1920-1973)
《ふるさと》

1965年
紙本彩色、額装
45.0 × 64.0cm
平成29年度横山基子氏、彩子氏遺贈